

学 位 論 文 要 旨	
氏 名	鬼頭 景子
題 目	現代的水産業の発展に貢献しうる高等教育のあり方に関する研究 (Study on the Role of Higher Education in the Contribution to the Development of the Modern Fishing Industry)
<p>近年、遺伝子レベルでの研究開発や ICT を活用した水産業が注目されている。これらの実現には、高度な技術を持ち合わせた専門的かつ横断的人材が求められている。しかし、大学における水産教育がどのように水産業へ寄与してきたかは明らかとなっていない。そこで、本研究では、日本の大学水産教育の実態と産業との関連性を明らかにし、水産業に貢献できる大学水産教育のあるべき姿を学術的に検討し、提案することを目的とした。本研究では、日本の水産系学部の典型例である鹿児島大学水産学部を研究対象として調査・分析を行なった。国際比較では、UiT ノルウェー北極大学、ベトナム・カントー大学を対象に水産教育カリキュラムの調査を行ない、以下のことを明らかにした。</p> <p>第一に、日本では、水産系学科のハード施設の規模は固定化しており、縮小傾向にある学科の教育組織の規模の変化との整合性を失っている可能性がある。教育課程の変遷に関しては、もともと漁業・製造・経営を中心に始まった。そのような中で、漁業が遠洋漁業中心から沿岸漁業へと変化し、さらに資源管理や環境保全の必要性が生じたことに対応して、教育にも資源や環境の要素が加わった。よって、日本の大学水産教育は、漁業や養殖業の発展に沿った変化を遂げてきたと評価できる。しかし、大学における教育課程は、漁業生産増大期には漁業・養殖業の人材ニーズに見合っていた一方で、近年では食品製造・流通分野が拡大した水産業の人材ニーズとの間にギャップが生じている。</p> <p>第二に、海外の水産主要国では、水産業・養殖業の川上から川下までの幅広い企業等への就職を実現させ、産業のニーズに見合った人材を育成している。例えば、ノルウェーでは、学部教育をあえて分化させず、大括りで産業に基づいた汎用的な教育を実施している。他にも、ベトナムでは、産業の現状に合わせて成長産業に特化して、産業志向の教育を提供している。一方、日本では、水産学を学問として分化させ、幅広い分野で教育を提供しているが、それらを統合せずに分断、独立した学問としてカリキュラムを実施している。そして、専攻した教育分野に関わらず、卒業生の約半数が食品関連企業へ就職する。ゆえに、教育内容と就職先との結び付きが弱く、在学中に学んだことを社会で活かすことができない状況を生み出している。このような現状から、この3カ国では、大学水産教育における専門に対し異なった定義を持っており、これが大学水産教育や産業からの人材ニーズへの対応の違いに表れていると言える。</p> <p>以上の結果から、日本の水産系学部は、①水産業の構造を考慮して、教育体制やカリキュラムの改革を行ない、②水産業のバリューチェーン全体を見通したカリキュラムを構築し、③水産業の現場からの人材ニーズの明確化を図り、④成長が期待される分野に重点を置いた教育を提供するべきと考える。このような取り組みにより、汎用性の高い教育と成長産業に特化した教育を同時に実現し、水産業に貢献できる人材育成を達成できると考える。</p>	